



## フィールド・ミュージアム

キャンパスでムササビとの出会いを楽しみ、付属図書館のビオトープでチョウやトンボに親しむ。また、水掛菜栽培など、地域の人びとの暮らしや知恵にも学びながら、人と自然とのいい関係をつくっていかう、というのがフィールド・ミュージアム部門の大きなテーマです。ここでは最近のおもな取り組みを、参加者の感想とともに報告します。

担当 今泉吉晴・北垣憲仁

大学キャンパスにある「ムササビの森」づくりの第二回作業が一月二十九日におこなわれました。この森づくりに共同で取り組む国際ソロプチミスト山梨・芙蓉のみなさんと、学生あわせて三四名が参加。今回の作業は、巣箱かけと導線づくりを中心に参加者がグループにわかれて取り組みました。およそ三時間の作業をおこない、地上十メートルの高さに巣箱を設置しました。

16

## 「ムササビの森」づくり共同作業に参加して

矢羽正子

二回目の「ムササビの森」の共同作業は、雪が白く森をおおって、ウクライナ民話の登場人物になったような、のどかな温かい心に戻れる時間でした。

動物たちを驚かささないよう静かに進める作業。雪のなかで倒木を鋸で刻んでいる傍らでは、六メートル以上も木に登って枝打ち作業に励む学生の皆さん。共同作業は順調に進みました。途中、雪の斜面を滑りながら登りました。そこから見えるすり鉢状の地形の部分が「観察ポイント」で、観察会は三〇名位で行われる予定と聞きました。月明かりのような灯火に導かれて観察会が行われる様子を想像し、小さな子どもたちが参加しても安全な「ムササビの森」になるようお願い、開園を楽しみに待つ気持ちが膨らみました。

小径の両側に並べた木はモグラの通路、所々に横たえた木はモグラの横断歩道、小径に敷いた松の葉はミミズが繁殖する目的、とうかがいながら、今泉吉晴、北垣憲仁、両先生の動物た



ムササビの巣箱の位置から地上を眺める

ちに向ける「やさしいまなざし」を深く感じました。ここで森の動物たちと出会えたらどんなにか心が躍ることでしょう。二回の作業に参加したことで「ムササビの森」や「森の動物たち」は、私にとってとくべつな存在になるでしょう。

森を大切に思い、動物たちに「やさしいまなざし」を寄せる大人が多くなれば、住みやすく温かいふるさとになると思います。

やば まさこ・国際ソロプチミスト山梨・芙蓉

豊富な都留の湧き水を利用した都留市の代表的な農産物、水掛菜の観察会を一月三日に十日市場の清水貞一さんの畑でおこないました。春の種とりにつづき、今年度二度目の観察会です。環境・生態論の受講生など一二名が参加。水掛菜づくりの知恵を現地できかに学ぶ貴重な体験となりました。

## 水掛菜栽培の知恵に学ぶ

工藤詩織

都留で学生生活をしながら、わたしはずっと、「水掛菜ってどんなものなのだろう」と思っていました。わたしの実家では栽培していないし、その名前も、都留にきてはじめて聞きました。また、どうして都留でそんなに盛んなのだろう、と素朴な疑問をもっていました。

さいきん、友人の家での夕食のときに水掛菜が出てきて(友人宅の近くの、個人経営のスーパーで売っていたそうです)、それが私と水掛菜との最初の出会いとなりました。形はやはりアブラナに似て、味は少し水菜に似ています。

その三日ほどして水掛菜の観察会に参加しました。まず、畑に行く途中で注目したのが、道路わきの側溝に流れていた湧き水。近づいてみると驚くほどにきれいでした。一瞬、このまま手ですくって飲みたいと思ってしまうくらいです。

畑に着いて、さらに驚きました。畝のあいだには水がまんべんなく張っており、畑というより水田といったほうがぴったりです。水掛菜とはいうけれど、畑ぜんたいが水に浸っているとは想像もありませんでした。水分が多くてよく腐らないな、と感心してしまいました。むかしは水掛菜のほかにも、麦など、おなじようなスタイルで作られていた作物があることを清水貞一さんから教えていただきました。

今回、水掛菜栽培のじっさいについて現場で教えてくださった清水さんは、八〇歳とは見えない、元気な方でした。足腰もまだまだ丈夫そうで、農業をやっている人はほんとうに身も心も若いとつくづく思います。わたしの実家の祖父も七〇歳をこえました。が、いまでも現役で農業を営んでいます。腰が痛い、とか疲れたとは言いません。作業している姿を見ると、とても生きいきしているのがわかります。

水掛菜は都留の貴重な財産だといわれますが、今回の観察会を通して、本当にそうだと感じました。凍えるほど寒いこの地で、独特の気候条件、農法で作られる水掛菜。都留のブランドにもなるでしょうし、食農教育としても利用できるでしょう。清水さんや後継者の人にはこれからもずっと栽培をしていただきたいですし、水掛菜の可能性がさらに広がるように、都留文科大でもこの農法の知恵から学ぶ研究をつづけてほしいと願っています。

くどう しおり・本学社会学科二年



水掛菜の収穫



水掛菜栽培のじっさいを清水貞一さんに学ぶ

フィールド・ミュージアム部門では、活動の成果を展示として公開しています。展示活動は、みなさんとの交流を生みだし、深める機会ともなります。



# フィールド・ミュージアム

一〇〇四年、二月三日から七日まで、都留文科大のコミュニケーションホール二階にて、『暮らしの記憶展』を開催しました。この企画展は、フィールド・ミュージアム部門が、博物館学各論の授業と連携して取り組んだものです。都留の暮らしにまつわる写真を手がかりに、授業で半年かけて取材した成果をまとめました。学内外から一五〇名を超える方がたに来ていただきました。来年度も地域の「記憶」をテーマに、展示活動を継続していきます。

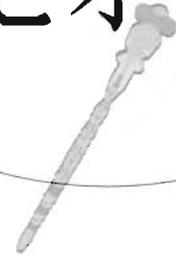
一〇〇四年一月に開設された富士急行線都留文科大前駅の駅舎の一画には、展示コーナーが設置されています。フィールド・ミュージアム部門では、この一画で、『富士急行線の記憶展』を開催しています。大月駅から河口湖駅まで富士急行線の記憶をたどるといふもので、博物館実習の授業と連携して展示パネルを制作しました。新駅から大学までは徒歩五分ほどの距離です。大学周辺の自然情報や観察会などのお知らせも随時、展示していく予定です。

附属図書館内にある展示スペースで、ビオトープの活動や、フィールド・ミュージアムの取り組みなどを紹介する展示を始めました。活動の内容や成果を知っていただき、観察会や森づくりの作業などに気軽に参加していただくというのが目的です。キャンプの自然に関する話題など、一ヶ月に一度ほどの割合で展示替えをしていきながら、内容を充実させていきます。附属図書館をご利用のさいはぜひご覧ください。またみなさんからの情報もお待ちしております。

フィールド・ミュージアム部門では、集めた情報を市民の方がたが利用しやすい形で整理し残すことも重要なことと考えています。今年度も『暮らしの記憶展』と『富士急行線の記憶展』を開催し、そこで集められた貴重な情報を二冊の目録としてまとめました。現在、過去の写真についても劣化しないようにデジタル化する作業をすすめています。目録、地域の写真に関するお問い合わせは、都留文科大 学自然科学棟二階、e-mail:kiagaki@is.uts.ac.jp までお願いします。

## 附属図書館

# ビオトープ



附属図書館1階からみた現在のビオトープ

二〇〇四年のまだまだ暑さが残る秋の頃のことです。ビオトープの周りに、見たこともないような虫が這い出してきました。図書館横の通路や駐車場、ビオトープの小道などにいたっては歩くこともできないくらいでした。「殺虫剤！殺虫剤！」とは言ったもののここはビオトープ。どうしよう、誰かに相談しようかなと思っていた翌日、今日は何やら鳥が朝からビオトープに飛んで来るなど思っていたら、昨

宇佐美千里

## はるかなとしつき

附属図書館ビオトープは、四月で二年目をむかえます。一年目は、チョウが吸蜜に訪れる植物を植え、世話や手入れをつづけてきました。メダカもずいぶんと数が増え、遊びにやってくる子どもたちの姿も見られるようになりました。一年目のビオトープは、すぐそばで働く附属図書館の職員の間にはどのように映ったのでしょうか。感想を寄せていただきました。

日まで這い出してきていた虫を食べているではありませんか。生きる物の「食物連鎖」とはこういうことなのかとそのとき思いを新たにしました。

キャンパスと地域の自然との「環境共生」の場として作られたビオトープ。図書館を建設する上で新図書館として何か特徴づけるものはないのか、都留ならではの何か。もともとはこの思いから発展させられ、考え出されたうちの一つがビオトープだったように記憶しています。図書館の窓越しからながめると、植栽された木々はまだまだ細く弱々しいのですが、北垣憲仁先生にお聞きするとあと一〇年から三〇年後

ですよ、と。これが短い年月か長い年月かは私には判断がつきませんが、生態系の年月とはこのようなはるかな時間を言うのでしょうか。

図書館とビオトープがお目見えして一年が経とうとしています。学長先生が新図書館に寄せて書いてくださった文章に「そこはまさに生きた〈知〉の創造の場でなくてはならない」とあります。図書館が学生の創造の場として成長するのと同じように、ビオトープも多くの人たちに育てられ安らぎを与え続けるようになることを願ってやみません。

うさみ ちさと・図書情報課



# 卒業論文・

# 修士論文

にみる

# 地域研究

地域交流研究センターは、その事業の一つとして、センターの趣旨に沿う卒業論文、修士論文、調査報告書などの成果を収集し、公開していくことを考えています。その準備を兼ねて、卒業論文・修士論文の特集を試みました。

ところで大学の教育・研究では、地元の方々にも多くの援助を得ているわけですが、その成果をご報告しなかったり、貴重な資料を散逸させたり、といった問題も生まれています。地域交流センターとしては、今後そういうことにも、課題として目を向けていきたいと思えます。

都留市における高校生の

「人生イメージ」と

学校教育の課題に関する研究

執筆者名

小坂文則

執筆年度

平成一六年度

専攻

大学院 臨床教育実践学専攻

指導教員名

田中孝彦

概要

本論文の執筆者は、現職の小学校教員であり大学院生である。この論文は、都留市出身高校生一五人の「人生イメージ」についての聴き取り調査をもとに、彼らの生活意識の特徴と人間形成の課題を検討し、そこから地域と学校と教師の課題を考察したも

のである。

ここでいう「人生イメージ」とは、「現在の時点に立って、過去の生活をふりかえりながら、将来をどのように生きていきたいかを思い描いた、全体的な生活意識」のことを意味している。都留の高校生たちの「人生イメージ」の語りの記録は、現代の青年の生活意識をリアルに伝える資料となっていて、興味深い。

調査の結果として、都留の高校生たちが、全体的に、地域に対して強い愛着を感じていること、友人関係で悩みながら成長してきていることなどが明らかにされている。また、印象に残る学習経験がほとんど語られなかったこと、話を聞いてくれ共々考えにくれる教師を求める声が強かったことなどから、地域に根ざす学校と教師の課題が探られている。

## 検索様式が自伝的記憶に及ぼす影響——高齢者を対象として——

執筆者名 阿波瞳、小俣芳恵、鶴田望  
執筆年度 平成一五年度  
専攻 初等教育学科 心理臨床専攻  
指導教員名 高田理孝

### 概要

平成一五年度に提出された卒論に、阿波・小俣・鶴田三名の共同で行われた「高齢者を対象とした自

伝的記憶に関する研究」があった。ここでは都留市の老人会を対象に、同一人物に対する二回の自伝的記憶の聞き取り調査が行われた(二回目の時点で、調査の対象となった高齢者の平均年齢は七九・二九歳(男七人、女一〇人))。

その結果、明らかに変わったのは、①他の年齢段階に比べ青年期の回想項目が多いというレミニッセンス・バンプ<sup>(註)</sup>が存在すること、②青年期の被調査者に比べ二回の再生における回想項目の重複率が大きいこと、③回想項目の内容で一番多かったのが「戦争」、次いで「生活」に関するものであったこと、④一回目の再生に比べ、二回目の方が「極めて快」という評価された項目が多くなったことであった。これらの結果から、自伝的記憶を語ることの意味が考察された。

## 大月空襲についての試論

執筆者名 深澤眞  
執筆年度 平成一四年度  
専攻 大学院 社会学地域社会研究専攻  
指導教員名 高岡裕之

### 概要

執筆者の深澤氏は、現在も大月市の中学校に勤務する現職教員である。一九四五年八月一三日になされた大月空襲に関する従来の説明は、大月が空襲を

受けた理由、飛来した航空機の機種、地域の被害の実態など基本的な点に関し、必ずしも一致しない状況にあった。本論文は、こうした状況に疑問をいだいた深澤氏による、大月空襲に関する初めての本格的な研究である。

本論文の最大のポイントは、国立国会図書館が最近マイクロフィルム化した米海軍史料を精査し、大月空襲が偶然的なものであったという見解を示した点にある。川崎市の東京芝浦電気工場を目標とした米第三八機動部隊第三任務群の飛行隊が、関東地方を覆った厚い雲にさえぎられて目標を発見できず、たまたま雲の切れ目から発見した「工場地帯とダム」に攻撃を加えたのが大月空襲の実相であったというその論旨は、緻密な考察に支えられた説得的なものである。

さらに本論文では、公文書や聞き取りなどにより、犠牲者一人一人の確定が行われ、その作業を通じて従来知られていなかった二名の犠牲者を「発見」している。

こうした考察を含む本論文は、地方小都市レベルにおける空襲研究の新たな可能性を示している。

(註)記憶・再生成績が、学習直後よりも、しばらく時間を置いた方が良い、という現象のこと。

## クルマ食痕から始まる ネズミとの関わり

執筆者名 本田深雪  
 執筆年度 平成一六年度  
 専攻 社会学科 環境生態論ゼミ  
 指導教員名 今泉吉晴

概要  
 美しい湧水を瑞々しく見せる発見

本田さんはこの論文で、本学で学んだ四年間で、都留の自然をどう発見的に探求できたかを、野ネズミの代表であるアカネズミのクルマの食痕採集の進捗と共に語る。尾崎山の森の散策をつづけ、野ネズミ、リスなどの動物との出会いに成功しながら、ある日、都留市十日市場の湧水群の一角にある「水小屋」で、不思議なクルマの食痕を見つける。これがドブネズミが食べたクルマの特異な食痕の発見だ。発見はそれ自体が一つの学説である。これまでリスのようにクルマの殻を割るか、アカネズミのように二つの穴をあけるか、動物がクルマを食べるには二つの型しか考えられなかった既存概念をくつがえす。だが、本田さんの探求は、そのような科学的発見を直接目指してはいない。発見は本田さんの自然探求の一つの偶然的な、予期せぬ幸運な結果である。本田さんは、卒論をこう結んでいる。「私も早くドブネズミが水小屋（の湧水）で過ごしている（どんなに進んでいく）時間に追いつきたい」。

## 介護保険の理念と現実

—生活保障法理からの考察と展開—

執筆者名 鳥沢文彦  
 執筆年度 二〇〇一年度  
 学科 社会学科  
 指導教員名 横田力

概要

本論文の執筆者は、入学当初より社会福祉、社会保障問題に強い関心を抱き、とりわけ老人福祉法の改正から介護保険法の制定へと推移する「社会福祉基礎構造改革」の展開を詳細に検討することを課題としていた。「措置から契約へ」を標語とする社会福祉の市場化の流れは、クライアント（依頼者・相談者）の選択の自由の拡大とは裏腹に、憲法二五条に基づく人間の発達保証と生存権の確保という普遍的課題を、各人の経済的力能に応じた財やサービスの分配へと誘い、結果として人間が人間らしく生きるということ自体に大きな格差構造をもたらすものであった。

このことは、その後にくる障害者福祉の同様な改革にも言えることで、本論文はこのような状況を、地方自治改革のなかで自治事務とされた自治体福祉行政の課題とあわせて、今日における生存権保証のあり方とは何か、という観点から実体調査もまじえ

て展開したものである。また著者は、『地域社会研究』八号と一一号に本論文の各論ともいえる論考を掲載（いずれも懸賞論文一位合格）、その論理展開の一貫性とあわせて研究者としての大成が大いに期待される所であった。

## 平和博物館のあり方

—平和博物館に見る日中歴史の比較

執筆者名 片山恵太  
 執筆年度 平成一六年度  
 専攻 大学院 比較文化専攻  
 指導教員名 笠原十九司

概要

本論文の執筆者は、学部時代に博物館学芸員となる資格取得のコースで勉強し、さらに都留フィールド・ミュージアムの活動に参加して、指導を受けるなかで、博物館の役割やと地域の関わりに興味と関心を持ち、平和博物館を修士論文のテーマに取り上げた。さらに比較文化専攻という専門に関わらせて、中国の戦争博物館・平和博物館との比較研究も行った。

執筆者は、沖縄、京都、大坂、東京など各地の平和博物館を直接調査に訪れて、展示内容や参観者の反応も含めた比較分析を行い、以下のようにまとめている。

日本の平和博物館においては、運営主体が国・政府である場合と市民・民間である場合とは、戦争の加害展示と被害展示をめぐって大きな乖離がある。前者は加害展示を行うことをせず、国民の戦争認識が伝わり難いものになっており、後者は過去の戦争を侵略戦争ととらえ、二度とそのような過ちを犯すまいという認識から被害展示と同時に加害展示も行っている。地方自治体の運営する平和博物館は、自治体によって差異があり、前者と後者の性格をもって中間で揺れている。

本論文は最後に、今後は市民が主体的に活動する場としての平和博物館が求められ、そのために日本国内だけでなく、世界的な規模での平和博物館ネットワーク作りが求められるという課題を提示している。

## 「苗字 稲城攷」

執筆者名 稲城和人

執筆年度 平成一六年度

専攻 比較文化学科

指導教員名 山本芳美

### 概要

この論文は、執筆者の稲城和人さんが自らの苗字の由来と歴史について、調査ならびに考察した労作である。日本には約一五万の苗字があるが、その系が判明しているのは二〇〇〇余姓にすぎない。電話

帳データによると、現在「稲城」の苗字は日本に三一世帯存在し、苗字ランキングの順位ではおよそ二万五千位に相当するが、その詳細は不明である。先行研究において、「稲城」は古代のかばね姓である「稲置」に由来するものだと説が提出されているが、執筆者はその検証を志した。実家の戸籍と家系を調べ、家系図としてまとめるとともに、大阪府と茨城、宮城、青森、兵庫、徳島、長崎の各県に住む「稲城さん」に手紙を書き、連絡がとれた方たちから家系や伝承について聞き取り調査をおこなった。論文中では、稲城の由来について前者の説とともに、稲東で積み上げた砦の「稲城」もその由来のひとつではないか、との説を提出している。また、家紋と伝承を手がかりに稲城の系統と伝承についても考察し、江戸時代初期の儒学者である山鹿素行に伴った高弟の「稲城」氏の移動が東北の各稲城姓の伝播につながるのではないかと、の仮説を立てた。

結果として、卒論執筆の間では、自らが名乗る稲城姓の由来と歴史については解き明かせなかった。しかし、生涯にわたって追究すべきテーマとして引き続き考察にあたるのとこと、今後の展開を期待している。

## 徳永寿美子論

— 児童文学史の視点から

執筆者名

齊藤俊光

執筆年度 平成一六年度  
専攻 国文学科国語教育学ゼミ  
指導教員名 牛山恵

### 概要

徳永寿美子は、山梨に生まれ、「お母さん童話」と呼ばれる多くの幼年童話を残した児童文学作家である。しかしながら、近年、その作品はほとんど読まれなくなり、その名前すら消えようとしている。そこで、山梨生まれでこよなく郷土を愛する筆者は、卒業論文において「徳永寿美子という児童文学作家が、児童文学の歴史の中でどのような役割を果たし、またどのような存在であったのか。徳永の再評価を試み」たのである。

「第一章 徳永寿美子の人生と作品」では、徳永が童話を書き始める動機となった子どもの死や成蹊学園との関わりが明らかにされる。「第二章 徳永寿美子の児童文学論」では、徳永の作品のテーマが子どもを思う愛情や子どもに向ける願いにあることが述べられる。「第三章 徳永寿美子の再評価」では、戦争肯定の作品を書いた徳永の戦争責任に触れ、また、戦後の児童文学史を考察する中で、徳永の「お母さん童話」衰退の要因が推察される。「終章」は、今日のような時代にこそ「子どもへの愛情が満ちあふれていた」徳永童話が求められるのではないかと、という筆者の思いで締めくくられる。

石松香代子

地域交流センター通信を送って頂きありがとうございます。

小学校の現場でも、地域との交流や連携はよく言われています。学校側が窓口を設けても、

地域の方との関係はごく一部の方との関わりにとどまり、なかなか広がっていかないのが現状です。大学院に行っていたとき、先生方と都留のまちを歩いたり、「在宅ケアを考える会」に参加したりしたとき、多くの学びがありました。うまく言えませんが、全体からじわじわと何かが分かってくるような感じでした。それは決して早くはないけれど、たぐり寄せるように学ばずイメージです。私が修士論文で記録していった子どもの会話も、同じような先の見えない活動でした。

地域交流センターの冊子を読んで、学校に勤める私たちのような教師が、何でも早急にものごとを進めようと、すぐ「結果」を出そうとするから、地域の人との関わりが築けないのではないかと思いました。地域の人々は、もっと長い、のんびりしたスタンス（構え）で生活しているのに、それに合わせられないのではないか。あまり「結果」を求めずに、地域の人の話を聞くことが欠けていたのではないかと思いました。

大学と教育現場の連携を考えたいとき、やはり交流センターの存在をもっと知らせることが大事だと思っています。大学での専門性に期待している人は多いはずですが、都留大の卒業生が、郡内地域にだけでも沢山住んでいます。卒業生が（小口尚良先生のように）はいきませんが、自分と地域を考える、あるいは大学との関わりを考える視点をもつことができれば、どんなにか楽しい仕事・活動ができるでしょう。同窓会など、あるいは夏季講座などを通じて、今以上にセ

ンターの存在を知らせることが必要だと思えます。卒業生が大学と地域をつなぐ役割を果たせれば、卒業生もずっと学び続けられるのですから願ってもないことです。

いしまつ かよこ・本学大学院修了生  
小学校教諭



topics  
トピックス

地域交流フォーラム  
への期待

第一回「地域交流フォーラム」では、多くの方がアンケートに文章を寄せて下さいました。以下は、そのときのアンケートからの抜粋です。

「ハソローの大学のように」が、どんな形で具体化していくのか、いつそう楽しみにになりました。（六〇代、男性）、「地域と学生との一層の交流事業をお願いします。」（六〇代、男性）、「地域を都留市に限定することな

く、郡内地域まで広がってほしい。」（五〇代、男性）、「地域交流センターの（地域）が、都留市オンリーにならないことをつよく望んでいます。」（五〇代、男性）、「また参加したいです。お互いの情報交換ができる場にしていきましょう。」（本学学生、女性）、「地域センターを拠点に、もっと市民や団体、学生の、顔の見える関係づくりをしていけたらと思います。」（本学学生、女性）、「大学を中心とした地域交流のシステムは、都留市の特徴として広げていく形だと思おう。」（小学校教員、男性）、「フォーラムが、地域交流のいっしょなつながりの場になっていくことが大切だと思います。」（二〇代、男性）、「都留で今育っているこのつながり、取り組みは、本当に実のある、そしてフィロソフィー（哲学）のある活動だと思います。とてもとても夢と勇気をもたらしました。」（長野県の小学校教員、男性）、「これからもときどき、こういうフォーラムを開いて欲しいと思います。」（六〇代、女性）

都留文科大 地域交流  
研究センター主催第一  
回「地域交流フォーラ  
ム」が開催されました  
(二〇〇五年二月二六日)

## まちづくりと 都留文科大の 関わり

清水絹代

午前中は、今泉吉晴氏(セン  
ター長)の基調講演、佐藤一子  
氏(東京大学大学院教育学研究  
科教授)のゲストスピーチが行  
なわれ、午後は、地域交流セン  
ターの活動報告と、参加者によ  
る意見表明、加藤春喜氏(トヨ  
タ白川郷自然学校準備室スタッ  
フ)のゲストスピーチが行な

われました。学生・院生、卒業  
生、都留青年会議所の方、起業  
家、教員、行政職員、市民活動  
団体、等等、多彩な分野の方々  
六〇名が参加され、「地域交流」  
への熱い思いが語られ、記念す  
べきフォーラムになりました。  
なお会場には、静岡の書店の展  
示・販売コーナーも設けられま  
した。

\*第一回地域フォーラムの記録は、三月  
未発行予定の『都留文科大 地域交流研  
究センター年報』第一号に掲載されます。

水と緑豊かな都留市は、私が  
生まれ育ち、自然にいだかれて  
生活している幸せを日々感じな  
がら過ごしている大好きなま  
ちです。しかしこの自然のゆた  
かさは住民にとってあまりにも  
当たり前のことで、環境保全に  
ついての市民意識は決して高い  
とはいえません。四人

の子育てをしながら、  
このゆたかさを次世代  
にどうつなげていくか  
を考えたとき、環境問  
題への行動を始めてい  
ました。

「地球的規模に視点  
を置きながら行動は  
足元から」を基本理念  
とし、主にゴミ、水問  
題に取り組んでしまし  
た。ライフワークの一  
つである「桂川をきれ

いにする会」「桂川・相模川流  
域協議会」の活動仲間の篠田  
教授<sup>さずき</sup>さんは県外出身の文大卒  
で、彼から環境問題に関して多  
くを学ばせていただいたいま  
すが、地元住民より他からの移  
住者の方が、悪しき点も良き点  
もしっかりと見えるものです。私  
自身は県外での学生生活の経験  
で、当たり前前に飲んでいた十日  
市場の湧水のおいしさに驚き、  
貴重な宝物だと初めて気づいた  
次第です。

つるまちネット(つるまちづ  
くりネットワーク)で学生とと  
もに活動しながら、彼らの市民  
より都留を愛する思いや視点に  
大いに刺激を受け、またまちづ  
くりへの学生たちの積極的な参  
画により、旧態依然の行政や住  
民意識にもすこしづつ変化が感  
じられ、嬉しく思っています。  
ささやかな住民の声と、学生の  
多角的発想や積極性とのつなが  
りが、都留に新しい風を吹かし  
始めている気がしています。

地方分権化が進むなかで都留  
市がいかに自立した基礎自治体  
として成長していくかを考えた  
とき、「地域交流研究センター」  
の役割は大変大きいものと感じ  
ています。過日参加した「地域  
交流フォーラム」や「センター  
通信」の内容から、関係諸先生  
方、学生の皆さんがいかに都留  
市を愛し、広い視野からまちづ  
くりに関わって下さっているか  
を改めて感じました。  
裏山観察会を始めとする取り  
組みの多くは私の生活圏内のこ  
とであり、私の思いと重なっ  
ています。私は、今は荒れてし  
まった里山や川の散策が大好き  
なのですが、この自然を守り育  
つて次世代へつなげたいという思



▲佐藤一子氏によるゲストスピーチ



▼基調講演をする今泉吉晴センター長

いは、まさにこの地域交  
流センターとの関わりと、  
つるまちネットとの関わり  
を通して、地域住民の  
なかに広がりをもたらず  
ものと思いました。そし  
てまた、大学と住民が対  
等な関係をもちながらま  
ちづくりを進めることが、  
すべての分野において大  
切なのではないかと思っ  
ております。  
しみず きぬよ・つるまちづくり  
ネットワーク、栄養士

◆山口県立大学からの視察がありました

## 「地域交流センター通信」に思うこと

石川正一

平成一七年一月一七日午後五時、滑る残雪を踏みしめながら本学の小川雅広教授と石川の二名が貴大学を訪問させていただきました。目的は「地域交流センター通信」(以下、センター通信)の発行に至る経緯及び運営方法について伺いすることです。畑潤先生や北垣憲仁先生と総務の吉野雅夫さんに迎えられ、ほぼ二時間余り丁寧な説明を頂き、充実した楽しいひとときを過ごさせていただきました。

貴センターが発行しているセンター通信を初めて目にしたのは、昨年の秋です。山口県山口市において秋田県本荘市、山梨県都留市、東京都八王子市、広島県庄原市、熊本県熊本市、山

口県山口市の六市が参加し「まち」『大学』(まちはだいがく)全国サミット」が開催されました。会議の趣旨は、まちと大学が一体となって、まちづくりに資する知恵を出そうというものです。その時の会議資料に都留文科大から提出されたのがセンター通信でした。

センター通信を見たときに、大学教員と地域の人々が同一の紙面で交流を行っていることに驚きました。今日、地方大学は地域との連携あるいは地域貢献がキーワードとなり、産学官連携をはじめ公開講座の実施など、地域に向けて多様な試みが行われております。本学も同様です。そして、大学が実際に地域との連携をはかろうとするとき、必ず直面する問題は、人と人との信頼関係です。そしてこの信頼関係の構築こそ、今大学が地域と共に歩む最も大切な課題であるように思います。

都留文科大で発行しているセンター通信は、そうした試みの一つとして地域のテーマをさまざまな人びとが多様な視点で

語る場となり、顔の見える信頼関係を築いているように思えます。そして、内容も大学らしく、まさに知を地域に生かし、ゆたかに遊ぶ精神を感じます。聞けば、一夜にして出来たものでないことも分かりました。編集者の苦労は大変でしょうが、こうした交流通信の継続は、やがて地域と大学の温度差を無くし、地域と大学の良い関係を築くに違いありません。

本学も来年度から同様な通信を発行したいと考えております。ときには話題の共有も行いたいものです。今後とも宜しくお願いたします。

いしかわ しょういち・山口県立大学地域共同研究センター研究員・助手



写真左から石川氏、小川氏(写真提供・石川正一氏)

◆堀尾輝久氏の講演  
(二〇〇五年一月二六日)

\*都留文科大大学院社会学地域社会研究専攻・都留文科大地域社会学会共催

## 「東京の状況から、憲法・教育基本法問題を考える」を聞いて

小橋哲也

「負うた子に教えられ浅瀬を渡る」という言葉があります。ときには自分よりも年下の者や未熟な者から教えられることがあるというたとえです。堀尾先生の講演会が終わったのち、思いついた言葉です。

いつのころから日本の教育は、心のゆとりをなくしてしまったのだろうか。自分を振りかえって思うのですが、若者には未熟なところがたくさんあり



講演をする堀尾輝久氏(東京大学名誉教授)

ます。その部分も含めて、若者が試行錯誤することを許してくれ、同時に大人としての自立を準備する場が「教育」であると思えます。

「学ぶ」ということの本当の意味とは何か。そして「教育」とはいったい何のためにあるのか。教育委員会も文部省も、負うた子に教えられる度量がなければ、この命題に答えられないのではないだろうか。そんな思いがした講演会でした。

こはし てつや・社会学科四年

# 喫茶店「ウイング」と「社会調査・地域調査」



喫茶「ウイング」(写真提供・榎本環氏)

## 榎本環

無神経なBGMや他の客の傍若無人な会話に邪魔されることもなく、静かにゆつくりとコーヒーを味わうことのできる喫茶店を探し出すことは、昨今きわめて難しい。だから、初めての土地では、時代に取り残されたような店構え(失礼)を選ぶことが多い。

二〇〇四年の春から私は「社会調査・地域調査」の授業を担当

当することになり、都留の街が私のフィールドとなった。調査の基本は、現地を自分の足で歩くこと。地域の特性を読みとくヒントを探しながら街歩きをしていたある日、喫茶店「ウイング」のその看板と出会った。初めて足を踏み入れたとき、一人で店をきりもりしているらしいオバチャン(鈴木さん)は私のことをすぐさま客だとは認識しなかった。ひいき目にみても若者ウケはしそうな枯れた店内。けれども随所にまで掃除がしっかりと行き届き、オバチャンの物腰に凛とした気品と温かさが満ちていた。私は確信を得て、街の第一印象などを語りかけてみた。オバチャンは私の賛辞に顔を綻ばせながらも、「静か過ぎて」と自ら街のさびれ具合をあつげらんと笑い飛ばした。その日から「ウイング」は私のフィールドワークの拠点となった。

大学や学生気質のことなど少しづつ口を開いてみると、鈴木さんはそれらに通じていた。聞けば、店を開いたのが三〇年前

く前で、かつて賑やかだった頃には店のある栄町界隈にも文大生が下宿していて、アルバイトに通ってくる者もあったという。鈴木さんとの何気ない会話のなかから、私は、街の活気を物語る風景のなかにはいつでもどこかに文大生の道行く姿があり、時代とともにその中心が、かつての谷村から都留市駅界隈へ、そして大学周辺のバイパス沿いへと移っていったことを知った。考えてみれば、鈴木さんのような立場の方は、生活者の視点から、街と学生の移行行く姿を何十年にも渡って、いわば「定点観測」してこられたわけだ、その観察視点は地域調査にとつて貴重な情報資源であることに気付いた。昭和三〇年前後の街の様子と人びとの暮らしぶりを、当時の子どもたちの日常生活を、そして「八朔祭り」の移り変わりを、私は鈴木さんから教わった。都留の水の美味さも、七月の「お天王さん」祭りのことも、昔の町名の読み方も、かつて宝地区に鉾山があったことも、すべて「ウイング」

で学んだ。また、「店に来るのは身内ばかり」と自嘲を交えて紹介してくださった固定客と意気投合して交わした世間話からも、地元の言葉遣いを学び、都留に暮らす人びとの最新の日常生活と「家族のストーリー」について典型的なイメージをつかむことができた。

お世話に感謝して、時折受講生たちの初期レポートやフィールドで撮り溜めたデジタルカメラ写真を披露すると、思いのほか興味深く見入ってくださった。その反応から私は、われわれの調査者視点、住民の一人として日常の世界を生きる鈴木さんに対して新鮮な視座を提供していることにも気付いた。「ウイング」でつかんだヒントをもとに調査を進め、経過報告に立ち寄っては、また新たなヒントをいただুক。そういうふうにして二〇〇四年度「社調」の地域調査は展開していった。

## 情報未来館ⅠT講座(二〇〇五年二月四日)

◆田中夏子氏(本学社会学科教員)が、「人間らしい働き方・暮らし方を求めて」と題して講演し、質問に答えました。光ファイバーを使った双方向のものです。以下は、参加した生徒たちの感想文より。

「情報未来館で谷校、都留文科大で都留二中、桂では桂高校と、三ヶ所が同時につながって一緒に講演を聞いたことはすごいと思った。」(谷村工業高校、一年男子)「自分は何になりたいということはあっても、どう働かまでは考えていなくて、今回の講義でどう働くかを考えさせられました。」(都留第二中学校二年男子)「自分で職を創ったり、地域でまともって何とかしようと思分たちでできることを見付けたり、そういう人たちはスゴイと思った。」(桂高校、二年、女子)



講演をする田中夏子教員(写真提供・情報未来館)

## ●編集後記

○嶋田鋭二氏の、アカ族との交流経験に基づいた巻頭文は、「交流」というものの世界的、歴史的視点を提示してくれています。私たちは、私たち自身の生活を大切にすることと、広く人間の課題に思いを巡らせることを連続するものとして考えていきたいと思えます。

○学生・留学生の居住生活を特集しました。全国から学生が集まり、そのほとんどが大学周辺で居住するということは、都留文科大学の特性の一つなのですが、そのことを大学がある真剣さをもって見つめるといえることは、久しくなかったといえるでしょう。市民とともに考えるべき大事な課題（＝可能性）があるように思われます。

○この通信を、ほんとうに市民との共有の広場にしていきたいと考えていま

す。それで、地域の楽山自治会の方々（約20名）に過去の2号分をお渡しし、アンケートを試みました。読み易さと記事の面白さについては、多くの方が「比較的読みやすい」「比較的面白い」と答えられ、通信への関心としては、大部分の方が今後も「読んでみたい気もある」と答えられました。アンケートにご協力下さった方々に心より御礼申し上げます。

○前号（第6号）に間違いがありました。12ページの、望月育代氏の肩書きは、「東桂小学校教諭」ではなく、正しくは「東桂中学校教諭」です。また、19ページの執筆者名は、「中村恵子」氏ではなく、正しくは「中田恵子」氏です。お詫びし、訂正いたします。

○次号の特集は、「フィールド・ミュージアムの展開」を予定しています。

（編集長・畑潤）



地域交流センター通信 第7号：2005年3月24日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（今泉吉晴・田中孝彦・森博俊・畑潤・田中夏子・北垣憲仁）

（C）発行：都留文科大学地域交流研究センター

F 402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341（代）

統括編集者：北垣憲仁